後　記

鈴木千佳子先生による商法合同演習の最終回では、サプライズで学生から花束が贈られました。それに対して、鈴木先生より、ご自身の学生時代の商法合同演習の教室の様子を振り返るエピソードが披露されました。当時の合同演習は、高鳥正夫先生が主宰され、米津昭子先生、阪埜光男先生、倉澤康一郎先生、加藤修先生、宮島司先生、並木和夫先生が並んでおられたそうです。居並ぶ先生方の前で緊張しながら報告する学生は、厳しいご指導にうまく応答できず、当初の立場から後退してしまう場面がよくあったそうです。するとある時、倉澤先生から、みなさんは、この報告に至るまでに、一定の時間この問題に向き合ってこの場に臨んでいるのだから、自信を持って報告できる前提があるはずだし、他方、教員側はその場の思いつきで言いたいことを言っているのだから、質問にも自信を持って応じたらよろしいとの趣旨のご発言があり、まだ大学院生でいらした鈴木先生にはとても印象に残る言葉であったと回想されました。合同演習の学生諸君には、まずはしっかり準備して報告に臨み、厳しい指摘にも萎縮することなく発言してほしいというメッセージと受け取りました。学生の立場も、教員としての立場も経験している身としては、倉澤先生の言葉は実感として大いにうなずけるところがあり、また、そのようにお話しになる倉澤先生のご様子が目に浮かぶようでもあり、このエピソードをこんにちの合同演習の教室で伺えたことは貴重なことでありました。

鈴木先生は、合同演習でも商法研究会でも、学生やメンバーによる報告の後、改めて報告の主旨・主眼を問い、報告者の意図を引き出すようにしてから、質疑に移ることを常とされました。主張や問題点がはっきりするよう丁寧に報告者に質問し、十分に問題点を整理したうえで、全体での討論に入っていくというスタイルでした。鈴木先生が、そうしたスタイルで教室や研究会を運営された背景の一端に触れることができたようです。慶應商法学の伝統の重みを改めて感じながら、鈴木千佳子先生に本号を捧げます。

二〇二六年一月

法学部教授　杉田　貴洋